三河アララギ

平成二十三年

八　月　号

第五十八巻　第八号

ニューヨーク日記(58)

http://blueshoe.copetin.com/

BlueCat, Shoe Lady

May 18, 2011 : Chefs Cook for Japan

Blue Shoe Diaries

東日本大震災支援金のイベントChefs Cook for Japan に行ってきました。アメリカの大物シェフ達勢揃いで日本の食文化がどれだけ一流シェフ達をインスパイヤーしてるかよく感じました。シェフ達とちょっとお話しながら色々と美味しいものがサンプル出来たよ。中にも鉄人森本さんがと〜っても美味しい中トロ握っていました。(ShoeLadyはちゃっかり鉄人にさび抜きにしてくださ〜い！なんて言ってました。ニコニコで応じてくれましたよ〜)

We went to Chefs Cook for Japan,a benefit for Japan's earthquake relief fund. All the superstar chefs were there which tells you how much Japanese cuisine has influenced the world's best chefs. It was a rare occasion to see and be able to taste morsels from such a caliber of chefs at the same time. Leading the way was Iron Chef Morimoto who was handing out amazing pieces of chu-toro tuna sushi. He even obliged to ShoeLady's request of no wasabi with a smile!

目次

第五十八巻第八号（通巻六九二号）

表紙・ひまわり　今泉　由利（1）
ニューヨーク日記（58）　Blue Shoe（2）
感銘歌・御津磯夫第二歌集「ノボタンの窓」より　（4）
歌集・一本の木　杉浦　弘（5）
雨だれ　岡本八千代（6）
燕の巣　白井　久吉（7）
月桃　今泉　由利（8）
野苺　伊藤八重子（9）
梔子の花　弓谷　久子（10）
習う　青木　玉枝（11）
玉蜀黍　内藤　志げ（12）
四葉のクローバー　安藤　和代（13）
梅雨寒　胃甲　節子（14）
伊勢の旅　林　伊佐子（15）
手をひかれつつ　清澤　範子（16）
完璧　北川　宏廸（17）
梅雨時なり　近藤　映子（18）
心晴れぬ　伊与田広子（19）
朝顔の苗　金津　文枝（20）
花水木　半田うめ子（21）
かなしみ　杉浦恵美子（22）
二葉　堀川　勝子（23）
歴代の廟　平松　裕子（24）
麦秋　山口千恵子（25）

結葉（むすびば）　小野可南子（26）
防人の地へ（3）　夏目　勝弘（27）
人形焼き屋　秋山　逸穂（28）
猛暑　伊藤　忠男（28）
雨の日　白井　信昭（28）
「ことよせ」　いーはとぶ（29）
出番　阿部　淑子（29）
「俳句」　植村　公女（30）
　一石（30）
　喜仙（31）
　晧一（31）
私の一首　近藤　映子（32）
　清澤　範子（32）
　金津　文枝（32）
　（33）
贈呈誌　六月号　今泉　雅勝（34）
絹の話（8）　一石（36）
物理学者と詩歌の世界（19）　鮫島　満（38）
鎌田敬止という人（五十六）　佐藤　喜仙（40）
和歌から派生した季語の本意（その十三）　岡本八千代（41）
「氷魚」のことから（127）　今泉　由利（42）
ことのはスケッチ（392）　平松　温子（43）
和菓子街道（58）　（44）
お知らせ・編集後記・三河アララギ規定

感銘歌

御津磯夫第二歌集「ノボタンの窓」より

拾ひつつ幾年培ひ来ましをわがやすやすと享けて掌にあり

P 173

生きをりて長きなげきをいひましきこの花かげの浄しましろし

P 174

歌集　一本の木

杉浦　弘

海よりの風に向きつつ舞ふ鳶のおのづからなる尾の傾きや

やうやくに硯に向かふ白妙の君たまひたる和紙をひろげて

黒曜の広目の眼われを見ずわれのうしろの彼方をぞ見る

雨だれ

蒲郡　岡本八千代

「仰臥漫録」今夜も読みをりいつまでも雨だれ落つる音きこえつつ

いつしかに君との思ひ出離(か)れてゆく夕べ夕べの梅雨の雨だれ

音沙汰もつひになくなりこの夜もただ雨だれのしづけきリズム

われにすぎし友よ幾たり思ふ夜よダチュラの花のにほひくるかな

今宵出でし下弦の月の淡き影その下にわれと猫ココとのみ

先生の傘さして来よの短冊を梅雨晴のけふもかがけて愉し

髪を切りいつもの吾とちがふ吾の心地こそすれ梅雨晴れのけふ

白秋の「思ひ出」読みて浮かびきぬわれにもありし若き日のこと

かつてありしあえかなる日の我の思ひ出などかはしらず想へてならず

無責任といはれたるままそのままに昼の陽はやも暗くなりつつ

燕の巣

新城　白井久吉

朝顔の種子の袋の封切りて苗箱に播く二十六粒
雑草を楽しむ庭にあらざるも脚腰痛みどうにもならず
ストーブも電気ごたつも片付かぬうちに早くも真夏日の声
表札の上の燕の巣をねらひ蛇は早くも襲ひ来れり
泥んこの運動会と名をつけてただの遊びも学習なりと
野の蛇に此処に燕の巣の在るがわかる筈なしされど知るのだ
村中の田植終れば日を定め農を休みしことも絶えたり
新しく入れ歯の成りて数日を過ぎたる今も口に馴染まず
盆栽の松の葉先に止まれるはいまだ幼きカマキリなりき
子ツバメの巣立ち行く日は吉日と言ふも一つの民俗ならむ

月桃

東京　今泉由利

島道に添ひて続くる白き花月桃といふ名をよろこべり

餅米の粉に蓬（よもぎ）を搗きこみて黒糖の味月桃の餅

香ぐわしき香りを放つ月桃の葉にくるまるる餅にやすらぐ

三朝（みあさ）なさな月桃の餅頬張れり奄美大島甘（うま）し美（うま）し

背高くてトゲトゲあざみの茎といふお浸しにし炒めたりし

足指をニュルニュルニュルル田の泥の細かき粒子泥にて染むる

恐竜の思ほゆ巨大ヒカゲヘゴ毛むくじやらにぐっしよりの雨

洗へども洗へども泥濯げども私に積もる泥の粒子は

宇宙なる同じ素材に出来あがる人の姿を今日クロッキー

人の目に見えぬ故に人間の言葉をもちて暗黒物質

野苺

豊川　伊藤八重子

里芋の味噌汁喜ぶ夫とゐて子らはしばらく旅行に行けり

穏やかな笑顔をみせる家息子老いしわれらを支えくれをり

洋傘を差しかけられしトマトの木瑞々しき青果重なりて生る

遠足にて元気に登りし宮路山の若葉が見ゆるおとわの杜より

庭畑の掘りたて馬鈴薯の大つぶ小つぶ笊に見せたり笑顔の婿殿

三人（みたり）ともいい子でよかったよ夫より最初で最後か言葉が聞こゆ

嬉しさと哀しさと湧けりおとわの杜に親しき友とけふは逢へたり

薬を飲むコップの水を食卓に差し出しくるる今朝の老い夫

一碗の紅茶に入れてたのしめり庭より採りし野苺の香を

娘の家に朝寝し昼寝し留守番のわれの見てゐる六月の雨

梔子の花

豊川　弓谷久子

あかときに目覚める癖の我となるきれぎれの夢接合せをり
さきがけて萼紫陽花の白き花我の好める隅田の花火
我が目にはどうせ見えぬと諦める螢戻り来し夜の御津川
いつせいに梔子の花咲き揃う香り満ちをり庭いつぱいに
梔子の花の香りに酔いしれる我に至上の驕りのひととき
梅雨の晴間の心和ませ御津山に鶯啼きぬ今年も啼きぬ
久びさに子と連れ立ちていそいそと心昂る名古屋の雑踏
元禄二年梅雨晴れの今日平泉に松尾芭蕉は到着せしとぞ
五月雨の降り残せしとふ黄金堂奥の細道今宵又読む
みちのくは我には遠し思ひのみ毛越寺にも永平寺にも

習う

伊丹　青木玉枝

著莪の花終りに近き境内の木漏れ日ゆらぐ歌碑に寄りゆく

花水木の真白に散り敷く裏小路踏むには惜しく足の置き場所

どくだみの花の愛しき庭すみの木陰に群れて雨に濡れいる

花菖蒲の紫みつつ立ち止る豊橋の友よ如何におはさむ

しみじみと友と旅せし幾とせを思ひつ伊丹に五年過ぐ

顔の皺伸ばし伸ばして鏡見る毎朝同じ顔を見つつも

「御座候」何を売る店か立ち止る三河で言へばたいこ焼きの店

東北の慰問に送るマフラーを嫁に頼まれ編みつつ六枚

年老いて学べる事のうれしさよ今日よりデイーにて習字を習う

看護師の計る血圧変りなし今日も爽やか優しき声に

玉蜀黍

豊川　内藤志げ

本宮の裾野に疾し黒き雲危ぶみてをり台風進路
庭芝にしろじろ白く夏椿白きままにて雨の日暮るる
木に咲くも散り咲く花もすべて白雨のひと日を縁側に過ごす
刻々と台風進路をテレビに見る玉蜀黍は今花盛り
台風の過ぎたるらしと夕食後玉蜀黍はと夫は出でゆく
地に伏する玉蜀黍も翌日は傾きつつも起き上りゆく
台風の過ぎにし西風の荒ぶれは玉蜀黍の受粉を助くる
大雨の予報は外れ野外活動に大きリュックの穂乃香は出で行く
六月の鶯の声強く聞く薮より離れぬ烏の二羽が
自動背負噴霧器（ミスト）にて槙の生垣消毒すわが手に殺す幾千の虫

四葉のクローバー

豊川　安藤和代

スーパーにタイ産チリ産ベトナム産並べある魚買うをためらう
ためらうを海は続いているからと大丈夫だと孫さらりと言う
山吹の咲き盛る道この朝も桃色ランドセル弾んで通る
幸せが来るよと孫の差しくれし四葉のクローバー根の伸び始む
新緑の輝きひときわ石巻山吉祥山背に人参間引く
砥鹿宮の祭り流鏑馬の柵を組む鉢巻きりりし新緑の中
枇杷の木にこの年やっと実のつけど好みし孫の遠く住みをり
揚雲雀点となりゆく一瞬に見失いたり夕迫る空
正月に花壇賑わせし葉ぼたんの芯伸びのびて今花盛り
「落し文」虫の名前に魅せられて探して林道ゆっくり歩む

梅雨寒

豊橋　胃甲節子

小麦熟るる田のみ残して植え終る広き水田の清しきみどり

朝も夜も絶へず聴きゐる牟呂用水の豊かな水音清しき水音

此れと言ふ楽しき事は無けれどもお隣の優しき気遣ひ嬉しく

鳥も来ず蝶々も来ず木に登る大きな蝸牛の渦巻見てをり

昨日書きし手紙を出せざるもどかしさポスト迄行く五分を躊躇

巣立ちせるは何鳥ならむ繁り増す桜の枝にて羽搏くばかり

梅雨寒の足を炬燵に暖めつつ読書の気力さへ今日は無きなり

たまゆらを煌き落つる雫なり只美しと葉先見つめて

取水場の改修工事日もすがら今日は重機の音が聞こゆる

伊勢の旅

岡崎　林伊佐子

四回目のきようだい旅行の伊勢の旅みな健脚に老いを忘るる

弟の二台の車に分乗し伊勢の随所に思いめぐらす

三十路にて逝きたる母の面影をしのびて吾は二見浦に来つ

夫婦岩バックに写すきようだいも金婚前後の笑顔そろひぬ

宇治橋を渡りて広き五十鈴川に真鯉一匹泳ぎてをりぬ

妹と漫ろに歩む森のなか時を超えたる太き神杉

村内の散策終へて安土城に天上天下道のエスカレーターに乗る

せまき階段のぼりて着きし七階の「黄金の間」は豪華な建築

六階の展望台にて見渡せば伊勢湾が見ゆ晴れたる今日は

安土城に桃山時代の戦況を遠き世となる信長しのぶ

手をひかれつつ

春日井　清澤範子

三人の家族なりけり婿あらば暮し変るかも今日の日和を
八王寺神社に詣で賽銭を投げ入れ拝礼今日の始まり
父が刻りましし寿老人の置物を見て喘息の養生をする
並べあるケースの中の博多人形幾度も目をやる喘息を病ひて
薬を強くしますと点滴の後主治医は白き錠剤を増やす
夏至の日の長き一日暮れにけり夕餉の冷麺明るいうちに
風そよぐ堤防の桜木緑濃く娘と歩く手を引かれつつ
病院へバスに乗るなりバス停は梅の花咲く公園の前
剪定したる赤白混りの椿花残る枝先に大きく咲きぬ
前立腺の検査に夫と肩並べ葉桜見つつバスに乗るなり

完璧

東京　北川宏廸

岩手県山田町を山田さんらが支援する「山田プロジェクト」あり
ＥＴＣを料金払はず通過するのを「かるがも通行」といふらしい
われ思ふ不良資産とは目下のところ浪費さるる電力と被災者の借金か
玄海原発再開容認さうならば安全情報公開望む
この世では「ｘ八乗マイナスｙの八乗」が成り立つと宮沢賢治は
現地まで行きし人のみ知ってゐるテレビに映らぬ愚息のことを
形あるものが燃えゆくほんの一瞬青き火の見ゆることあり
窓を閉め表土を削るといふけれどそこにも生きる生きものがゐる
考ふればすべては海より生れ出でたる人の命も地震も津波も
完璧な妻の短所はただひとつ花の名前を幾多知ってゐる

梅雨時なり

名古屋　近藤映子

わが夫の見舞ひに通ふ手提袋に「冨士の雲の影」今だに入れをり

雨もよい続きて傘を持ち歩く五月の梅雨（つゆ）入めずらしき

あな寂し夫は病院我娘仕事に行けば吾一人なり

わが夫の又発熱と聞きたればあせる我気が急ぎ足

娘よりハイ！と渡さる花菖蒲かたき蕾の開き始むる

花菖蒲薄紫の大き花次々開き水替え楽しく

梅雨（つゆ）入のニュース早くありたれど雨降る日々は少なけり

水無月と呼びたる六月曇り日の多いと思い今日も曇り日

旅に出し娘は明日に帰り来ぬ洗濯物をたたみて待ちぬ

予定通り娘は旅より帰り来て当前の事なりホットする

心晴れぬ

豊橋　伊与田広子

梅雨空の如くわが心晴れぬ日々東海地震や津波案じて

わが家は低き所に建ちてをり津波は豊川を逆流するに

原発の廃止の提案否決さる電力会社の株主総会

津波など過去の歴史は物語る千年前の痕跡ありと

日傘さし日中外へ出たれば顔はほてりて頭は暑し

熱中症このようにしてなるかと用事果たすも考へやらむ

熱中症強きと弱きあるらしきわれは弱きに気を付けをらむ

猫飼ひて名作残しし作家あり夏目漱石内田百閒

われ猫を飼ひたし思へどガレージの客の気持を考へ飼わず

猫飼へば短歌も上手になりそうな気持はあるもガレージ考ふ

朝顔の苗

島根　金津文枝

身辺整理すれば磯夫先生より夫に歌碑建立の立派な絵ハガキ出で来る
歌碑の下に磯夫とハッキリ掘りあり白く細長く松の木に並ぶ
今年も斉藤茂吉記念歌集三十七集由利先生の歌自分の歌心して読む
杉の館（ヤカタ）タブの木の丘春蝉が頻りに啼く雲雀も巣造に励む
水上花壇赤き睡蓮の花鯉も大きく人の足音に餌を望み泳ぎつきゆく
三百種類の百合ウチ百合タモト百合桃色黄色花弁大き白百合
直径五十米高さ二十一米巨大な硝子温室熱帯亜熱帯植物
雨の中句友より粽五本ぬくぬく菖蒲に蓬も添え佛様にと
朝顔の苗五六本持ち来て優しく心より交る句友あり
五月二十九日豪雨布部ダム山佐ダム放水サイレン頻り町中に響く

花水木

新城　半田うめ子

植へたりて花水木眺む広き庭文化会館の前方なりぬ
記念にて老人大学終りたり花水木植へ楽しみ見上ぐ
緑田の田園風景眺めつつ館山寺温泉へ孫香奈の厚意
十薬の真白き花の輝きし少しずつ取りて煎じて飲みぬ
学校を休みしことの多かりきやさしさの杉浦先生叱ることの無き
我が庭の紅梅の花散りしける下にて咲くは貝母百合の花
殺虫剤かけられたりし大たでの枯れてしまひき淋しかりけり
ぽとぽとと音たて落ちる藪椿数多の小鳥つつきて居りぬ
雨けぶる本宮の山眺めつつ西川の辺を歩き行くなり
楽しみて眺めゐるなり西川の上にて大きく青さぎの舞ふ

かなしみ

蒲郡　杉浦恵美子

ありとあるかなしみ嘗めし気のしたる夫の病に添ひて一年
二十二年夫と暮ししこの部屋を独り出て行く慌ただしくも
ふたりして壁面いっぱい貼り付けし巨大日本地図ひとり剥がしぬ
ふたりして巨大日本地図眺めつつ夕餉の刻を幾日経しか
食卓の夫の椅子の背手垢さへ契機となりて涙零るる
夫はもう何処にも居らぬされどされど暮ししよすが溢れてゐたり
ひと口に二十二年と云ふけれど我が人生の要の歳月
夫と共にこの歳月に悔いはない看取りし日々にも悔いはなけれど
長野から奈良から友が駆けつけて呼び掛けるうち夫は身罷る
八ヶ月酒飲めざりき夫のため麦酒数滴口に垂らしぬ

二葉

豊川　堀川勝子

もくれんの花びら揺らぐ揺れやまぬ今に戻れぬ震災の痕

もくれんの花盛り上がる花かげに被災せし吾子の平安祈る

椿咲く小枝揺らして日に幾度鵯は来鳴きぬ昨日も今日も

椿木の枝に鵯鳥今朝も来て輪切りの蜜柑を啄みゆきぬ

己が枝ときめて飛び来し鵯に輪切り蜜柑はたちまちに無し

震災も被曝も鵯は知らぬげに飛び交う影に我いやされつ

ひっそりと交り絶ちてかたくなに土を砕きてものの種まく

我が蒔きし跡そのままによはよはと淡き二葉の人参の萌ゆ

人参の淡き二葉の萌えて来し余震のニュース今日また聞きぬ

歴代の廟

豊川　平松裕子

指一本置けば潰れてしまふ虫命なりけり見過しやらむ

崩れたる土塀の内に静もれる深溝松平氏歴代の廟

一昨年より去年より今年崩れ著し土塀に見たり時の移ろひ

六月の暑き一日に廟の供華枯れたるもあり萎るるもあり

草木の一本もなき東御廟深溝松平氏の石祠の並ぶ

ゆるやかなる自然石の階の本光寺参道今年も登る

深溝松平七代の廟より出土せし金の遺物の褪せぬ輝き

この場所に草を取りゐし姉逝きて早や八年の時は過ぎたり

仕入れ値を切りて売りたるガラス盃この先出でくることはあるまじ

山峡の闇の中へと舞ひてゆく螢の光合ひ光るなく

麦秋

豊川　山口千恵子

激しかりし昨夜の雨に乱れつつ広々続く麦秋の畑

遊びても遊びても未だ足らざりし遥か昔の麦秋の野に

群になり空を巡れる土鳩らは収穫終はりし麦畑目指す

一斉に土鳩の群は降り立ちぬ収穫済める麦畑の上

刈り取りの終はりし広き麦畑に土鳩の群は蠢き合へり

たちまちに収穫終はりし小麦畑切り刻まれし麦わらの色

ゆらゆらとゴーヤの巻鬚のび上がる支柱に張りし網はすぐそこ

この先の信号渡りて野の道へわが田の水の具合確かめむ

ときはかる砂はしづかに落ち溜まる三分間のうす紅の砂

凋みたる赤き花殻摘み取りぬ年に一度のサボテンの花

結葉（むすびば）

豊川　小野可南子

風音のたちはじめたり夜を覚めて未知なる明日思ひあぐねつ

「左手出して」今日の千尋は手相見か「バーバあなたは明るい性格です」

腰に吊る蚊遣りほこほこ朝の畑緑増したる草を引きつつ

朝露の干ぬ間にこそと草を掻く紫蘇のカホリのかそかたちくる

デデッポーデデッポッポーとちかく聞く手鍬に小草掻き払ひつつ

墓めぐり珊瑚樹厚葉散らばふをやうやう掃き終ふ又一葉落つ

盆栽の梅は一粒実を成せりのぞき見するが夫の朝々

梅雨の雨に重く傾くデージーよ土に触るるか真白花ビラ

結葉（むすびば）とふ言葉ひとつを我がものとそぼ降る雨に青楓揺るる

茄子胡瓜はじけるほどの艶々に朝の光の差しはじめたり

防人の地へ（3）

豊川　夏目勝弘

妻亡くし旅人がひとり涙せし水城の土塁を今のぼりゆく

懐郷の念たちがたき都人ことあるごとに宴をせしや

梅の咲く旅人の館の歌の会いまその跡地の礎石の上に

太宰府の梅に小さきつぶら実がまさに咲き満つ花明りのなか

いつしかに奈良の空間に居る思ひ太宰府政庁の跡地よりの景

整然と礎石のみの政庁跡地ハシブトカラスの澄みわたる声

政庁の跡地上空は航路にてジエツト旅客機たえまのあらず

望郷に龍（たつ）の馬と叶はぬ願ひ低く飛び行く大き機影が

漠漠とせし春草の淡きなか千四百年の時空をこえる

広大な政庁跡地に太宰府の町民たちが三三五五と

人形焼き屋

「招待」　秋山逸穂

甘き香をあふるるほどに流しいる人形焼き屋の誘惑振り切る
東京の夜明けをおおう朝靄はうすむらさきと桃色を帯ぶ
柵を越え馬に鼻息かけられぬ草食動物の生臭き息
稜線の踏みしめられし細道は雲晴るるとき輝くごとし

猛暑

大阪　伊藤忠男

人の目を気にしてエアコン止めている我慢をしようこの夏の日々
息切らせエスカレーターかけのぼるいつのまにやら習性となり
ふくしまの影響なるかいつの間に灯りも暗し仲見世の宵

雨の日

豊川　白井信昭

雨の日のアザレア模様の観光バス路面に紅映してゆけり
東北のガレキと化した被災地を今宵満月照してゐたり

『ことよせ』

（西浦公民館　いーはとぶ）

ジャガ芋の畑に日照雨降りきたり夫は黙々鍬を振りをり　三田美奈子

鉢植ゑの紫陽花の蕾去年より少しは多し少しく嬉し　稲吉友江

去年の春君が語りし茶臼山丘には今年の芝桜の花　鈴木美耶子

子規庵の子規の臥しゐし六畳間ひととき我もここに坐れり　吉見幸子

色無地のピンクを藍に染めなほす母が仕度せし姉妹揃ひの　牧原正枝

この陣屋になんじゃもんじゃの木一本風吹きよせてさわさわの葉音　岩瀬信子

出番

東京　阿部淑子

集いきて頭を手足を肩腰を鍛練したり真摯に生きる

出番待つ舞台裏にて歌詞カード離せぬうちにはや出番です

カッタカタカッタカッタと京急線快音のなか心安らぐ

「俳句」

植村公女

不器用な父の老後や棕櫚の花

遠来の客の饒舌五月尽

末っ子のかくれてばかり山法師

一石

螢舞ふ天変地異を知りたるや

野辺送る人もまばらに蛙鳴く

凌霄花気の向くままの勢いや

白光に滝垢離の顔輝やけり　　喜仙

摩崖仏肩のあたりより滴れり

田が植はり緑の雨の降り初むる

雲垂れて匂ひたちこむ栗の花　　皓一

紫陽花や庭にふたたび雨激し

山法師山帽子とも白い花

私の一首

弥生とてまだまだ寒いひな祭小さな手作り雛をそっと出し置く　近藤映子

今年の三月は寒い日が続いた。私の生家では、母が旧暦のひな祭飾りをしていた事を思い出す。夫が倒れて入院してからは娘のガラスケース入の三段飾も物置きにしまったまま出せないでいた。ふとそれでも娘のために、これも夫が元気な頃階下の方のお声掛に応じて千代紙の4～5㎝の「雄びな女びな」を作ったこと思い出し取り出して玄関に並べ置いた。娘は夕方帰宅して玄関に入ると「アッおひなさま」と声を出した。私は「お帰り」と言わず「そうよ」と。

これからも幸せ多く来るやうに節分の豆升に入れたり　清澤範子

豆も今は市販で祈祷済のものを買って来て、升に入れるのです。周囲の家々の中声を出してまくのは吾が家だけ。玄関を明け「福は内」と大声で豆をまきます。升の豆を口に含めばカリカリと香ばしく音がして歳の数だけ食べるのす。今までも幸せな事ばかりではありませんが、苦しみに耐える中、こうして生きていられる幸せがある。私の願いは家族の健康です。私自身心を強く持つて家族を支えたい思いです。残り少ない人生に幸あるように。

九十才今の楽しみは午後三時ゆっくり湯浴みする暗くならない内に　金津文枝

広瀬町三ヶ月公園に、文化協会と歌を作る人達で夫の歌碑建立。茂吉先生指導戴き朝日新聞折り折り歌掲載後私の足骨折二ヶ月入院診察、杖を頼り歩行夕方に明るい内湯浴夕方の食事は後回し体重測定。体を清潔する性格島根総合福祉専門学校よりアララギより三河アララギと俳句指導するので生徒二、三人毎月茶話会を頼まれ六年間卒業式に二十二年二十三年卒業写真撮影、四月には二泊三日奈良大阪造幣局桜トンネルの旅の疲れは湯浴が一番です。

贈呈誌　六月号

「秋楡」

保証人の印を夫に求めきぬ息子は神妙に普段と違う　**杉谷良子**

凍りたる湖面に昨夜の雪積みて雪原をなす諏訪の湖　**白川あや**

「愛媛アララギ」

雪被る今日のお山は聳え立ち眩しき迄に稜線光る　**小川勝美**

庭に出れば草抜く癖の身につきて吾が指先の常に荒れをり　**玉木サカヱ**

「鹿児島アララギ」

夜に入りても煙霧は去らず昇りたる満月は赤く光放たず　**平城エミ**

うぐひすのしきりに鳴ける山畑に長茄子十本今年も植うる　**月精薫**

「高知アララギ」

はてしなき湖となりたし風のなか夫を誘ひてアーチ橋渡る　**廣見正子**

差し交はす枝移りとぶ青き鳥八つか十かいやそれより多し　**浜渦静子**

「滋賀アララギ」

三十年をへだて逝きたる父と母並ぶ写真は親子のごとし　**北村冨士子**

み吉野の奥深く来て象谷のみどりとけ入るせせらぎを聞く　**津島佐和**

「冬蕾」

くれなゐの花咲きさかる桃の園さまよひゆけば土やはらかし　**天野克彦**

音を立て石炭燃ゆるストーブにかざす手袋湯気立ちはじむ　**大塚亮子**

「群山」

電話の声に美しき人を思ひつつ注文の下駄に鼻緒すげをり　**入塚容**

木々芽吹く兆しと聴きし雨の音夜半は音なく雪に変はりぬ　**大石栄**

「柊」

雪のこる畝に肥を置く玉葱のかたむきしまま風にそよげり　**内上照子**

青茄子に真白き五弁の花持てば乾きし畑にひとり物言う　**前田照代**

「椎の木」

破傘すくすく茎を並べをり昨年と同じ百日紅の下　**浜田規子**

高架工事に伐られし楠のひこばえは赤みさしたる新葉繁らす　**鈴木秀子**

「穂の原」

広びろし別屋ありにき年貢米の俵を積みて置きにしものよ　**今村たかの**

姉と二人笑顔で話す将来を一人の部屋に目覚む明け方　**鈴木せつ**

「炎環叢書シリーズ1」

「歳月」

薄氷や遅れて気づくことばかり
薄氷や何も決めない決められず
なにごともなく過ぐる日よ月涼し　**イサベル真央**

絹の話 (8)

「アトリエトレビ」今泉雅勝

絹と蒙古襲来

絹は古代から国を富ます有力な物であった。中国の長安の都の繁栄も明治以降の日本の発展も絹に負う所が多く、一種の戦略物資とも見る事が出来るでしょう。

さて蒙古はジンギスカンの時代にどうして気候的にも資源的にもあまり恵まれないにもかかわらず急速に膨張し強大になっていった秘密は何なのでしょうか？

それは馬と兵服にあったと思うのです。馬の事は多くの人が語っています。日本でも義経が大勝利をおさめ得たのも、東北中国から奥州にもたらされた優秀な馬と騎馬の技術を身に付けたからに他なりません。再起を計り平家打倒の為にはどうしても奥州まで辿り着かねばならなかったのです。

蒙古は強大になる以前から度々渤海の方に南下し略奪を繰り返していました。

略奪といっても戦略に基づいて行われていた様で、「先ず銀を奪うべし、次いで絹を奪うべし」と行動規範があったと伝えられています。銀は容易に理解出来ますが、絹とはと誰しも疑問を持ちます。しかし蒙古が中国北東部の柞蚕（野蚕の一種）を大量に手に入れる事によって一気に強大になって行くのです。当時の蒙古には麻も棉も無く、殆ど羊やラクダの毛を利用したものでした。

この軍装では南下するには冬は良いが、雨が多く温度と湿度の高い夏に南への進出はむずかしいのです。毛製品はフエルト加工が多く、雨に当たると重くなってなかなか乾かない、汗をかくと雑菌が繁殖し異臭を放つ。ところがこの薄いフエルトに絹を加える事によって信じられない素材が出来たのです。絹を主としてつなぎにフエルトを加えるとしなやかで信じ難い程軽く蒸れなくて涼しいばかりか、皮膚病にかかる者が激減し、極寒の蒙古でもなかなか凍結しない、更に矢に対する防弾性が向上し、刀でも簡単に切れない兵服が出来たのです。（従来の物より20％位防弾性アップと思われる）兵にとって軽くしなやかで運動性に富み、一定の距離を保てば矢や刀の恐怖からも解放され、

傷を受けても殆ど化膿すること無く、戦の恐さを軽減する事が出来、思う存分戦えたようです。

同時に長距離を移動する馬にとって軽い兵装は消耗を減らし、さらに距離を延ばせたと思われます。強力な蒙古軍の成立です。

中学や高校の歴史の教科書の蒙古の襲来の図の蒙古兵はワンピースに羊の革の様なブーツで非常に軽やかです、かたや日本の武士は鎧兜で馬に乗っているが、騎馬技術も未熟で戦う前に馬に手こずっている様に見えます。

時の鎌倉幕府執権北条時頼の日記に「射れども射れず、切れども切れず」とあるそうです。あの着物は何だ！次回の襲来に備えてあの服を切れる刀を作らねばならないと考え、その製作に取りかかり、山陰の砂鉄を鍛錬して、反りを研究し、日本刀が完成されて行くと云う大きな国際的刺激を受けたのでした。

今日でも柞蚕は減産が続いていると云っても瀋陽を中心に2万トン集荷されております、20年前は4万トン有りました。当時どのくらいあったか資料はありませんが、既にかなりの量を作っていたと思われます。量が確保出来たからこそ、何十万と云う兵の軍装に利用出来たのです。この絹は東北中国にしか棲息しておらず、薄茶の繭で樫やブナ、楢等の葉を食べ普通の家蚕よりやや大きく堅い、ヤング率（のび率）も高い（衝撃吸収率が良い）、保温、放温、保湿、放湿性に富み、抗菌性、吸臭性、防紫外線性にも優れています。糸は家蚕より太く少しシャリ感があり、光を乱反射して特有なにぶい光沢を放ち、多孔質で軽いのですが、権力者は白く細くよりしなやかな家蚕絹を重用し、国家産業的には注目されず、今日に至る迄、地方産業として成り立ってきました。ところが素晴らしい特異な機能性が世界の注目を集め2年前から高騰が続いています。ほぼ同質な繭に日本では天蚕、インドではタサール蚕があります。

英語ではチャイナタッサー、ジャパンタッサー、インドタッサーと言います。

同様な話は織田信長が長篠の合戦の時、当時侍大将くらいから上の者しか着れなかった棉の服を雑兵にも着せて大勝利をおさめた事など身近に有ります。

物理学者と詩歌の世界（19）

－坂田昌一

一　石

坂田昌一（１９１１―１９７０）は湯川秀樹（参考資料１）、朝永振一郎（参考資料２）と共に日本の素粒子論研究の黄金時代を築いた巨匠の１人。東京出身、１９３３年に京都帝国大学を卒業。湯川秀樹の中間子論の第２から第４論文の共著者として協力。１９３９年京大講師を経て、１９４２年名古屋大学教授（参考資料３）。

１９４２年、核力の起源となる Yukawa 中間子と当時宇宙線中に発見された中間子との違いを説明するために、２番目の中間子の存在を予言（２中間子論）。後にパイ中間子が発見されてその正しさが証明された（１９４８）。また１９４８年、量子電磁力学に現れる無限大の困難を解決するため、凝集力場という新しい場を導入した混合場理論を発表。これは後に朝永振一郎が繰り込み理論を完成させるにあたり手がかりを与えた。１９５５年、中性子・陽子・ラムダ粒子が最も基本的な粒子であり、他のハドロンはこれらの複合系であるとする坂田模型を発表した。これは、後に基本粒子をさらに１つ増やした名古屋模型（１９６０、注１）および新名古屋模型（１９６２、注２）へと改良が加えられ、一定の成功を収めた。１９６２年には、ニュートリノ振動を予測する PMNS 行列を発表。１９６４年、坂田模型を拡張した斬新な模型がゲルマンとツバイクによってそれぞれ独立に提唱された。それは基本要素として、坂田模型の各要素の電荷をそれぞれ⅓減らしたもの（ゲルマンによりクォークと命名）をとり、現実の中間子（メソン）は従来どおり要素と反要素の２体系とするが、重粒子（バリオン）は要素だけの３体系とする。この模型は当時発見されていた多くの粒子族をうまく整理できたので、次第に広く受け入れられ、現在の標準理論の基礎を成している。

坂田は多数の弟子を育てたことでも知られる。坂田は研究を進めるにあたり、絶えずその方法論的検討の重要性を強調した。また現象論的規則の背後に物質的根拠の存在を、そして自然界の階層的構造を強調することは彼の持論であった。そこには武谷三男の三段階論法（注３）からの影響が色濃くあった。現在の素粒子論に至る発展のいくつかの重要な貢献が、坂田学派の中から得られている。坂田自身はノーベル物理学賞の有力な候補であったが、５９歳で逝去（１９７０）。坂田の思想を発展させ具現化したのが弟子の小林誠、益川敏英による素粒子の３世代模型の提唱であり（１９７３）、両名はノーベル物理学賞を受賞（２００９）。

坂田はまた武谷三男らとともに日本科学界の民主化に尽くした。１９４６年、戦後の学界に大きな影響を広げることとなった研究者組織の民主化に関する主張を展開した（参考資料４）。彼が重要な原則とした点は、第１に研究者の思索に完全な自由が与えられること、第２に研究室においてなされた仕事が、研究室に属する個々の研究者の仕事の単なる和であってはならない、であった。この主張は民主的教室運営を定めた名大物理学教室憲章の制定をもたらした。教授が絶対的権限をもった当時の講座制に対して、この憲章は研究員によって構

成される最高決議機関としての教室会議によって、教授などの選考をも行なうことなどを定めた。それは当時の若い研究者達にとって研究者としての自覚と自信を大いに鼓舞したものであった。坂田は研究室にあって、若い研究者と対等に付き合い彼らとの談笑を好んだ。

１９５０年学士院恩賜賞受賞。

１９５６年中国に渡り、物理学交流の端緒を開く。またストックホルムでの世界平和評議会にも出席。

１９６２年湯川、朝永とともに日本版パグウォッシュ会議を提唱し、科学者の平和に対する責任を訴える。

１９６４年北京科学シンポジウム日本代表団長。日本学術会議創設以来の会員。

坂田の言葉が残した言葉から。

1)「自然を全体的関連から引き離してその個別において研究する態度は自然科学の発展の初期の段階においては極めて有力な方法であり、近代自然科学の偉大な進歩の根本条件であった。…しかしベーコンに始まる斯様な形而上学的方法はその適用限界を超えればたちまち一面的な偏狭なものと化し、解くべからざる矛盾に迷いこむのである。」

2)「歴史の忘却」「固定化」「経験主義」という三害がはびこっている。

3)「エンゲルスの「自然弁証法」は私の４０年にわたる研究生活の中で常に珠玉のように貴い光を投げかけてくれた。」

4)「現代の原子論の特徴は、物質が単に不連続だと主張するのではなく、これらの不連続な部分、原子―分子―物体―天体などが一般的な物質の諸々の質的な存在様式を制約する結節点だという主張をしている点にある。」

注1)名古屋模型：ハドロンの基本粒子は、強い相互作用の源となるB物質とニュートリノ、電子、ミュー粒子とのそれぞれ結合したものとするハドロン・レプトンの統一模型。

注2)新名古屋模型（１９６２）：ハドロンの基本粒子を１つ増やした模型。弱い相互作用の分析から、電子ニュートリノとミューニュートリノの間に相互転化の振動現象が起り得ることを予見。これはごく最近実験的に確認された。

注3)武谷三男の3段階論法：われわれの認識は、現象論、実体論、本質論なる各段階を螺旋的に経過しながら深化する。

参考資料

1)三河アララギ、湯川秀樹、P40、第57巻、第3号（２０１０）
2)三河アララギ、朝永振一郎、P36、第58巻、第7号（２０１１）
3)フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）、坂田昌一』
4)小川修三『坂田学派と素粒子模型の進展』(http://www.soc.nii.ac.jp/jps/jps/butsuri/50th/50(2)/50th-p90.html)

鎌田敬止という人（五十六）

「月虹」　鮫島　満

白玉書房時代

〈高村光太郎との交流（18）〉

澤田の要求を受けて光太郎が書いた『智恵子抄その後』の「あとがき」は次の通りである。

先年、「智恵子抄」をはじめて世に送つてくれた龍星閣主人澤田伊四郎君が、今度は又、「智恵子抄その後」を、むしろ略奪するやうな勢で出版する。

「智恵子抄」は澤田君が戦後休養のため郷里に隠退してゐた頃、他の出版者が澤田君の快諾をうけ、二三の新作を加へて再出版したもので、今も世上に行はれてゐるやうであるが、戦後五年を経た今日、澤田君は郷里から上京して龍星閣再興に志し、昔のゆかりに因むものか、まづ私の「智恵子抄その後」に眼をつけた。

「智恵子抄その後」と題する一群の詩は六篇しかなく、（中略）六篇でも詩集になると澤田君はいふ。澤田君は私の手許から山小屋日記に類する文章その他を物色して、つひに斯ういふ一冊の詩集を構成してしまつた。

澤田が「澤田氏」を「澤田君」にさせたのは、光太郎との親しさを演出するためのものであろう。「他の出版者が譲りうけ」が「他の出版者が澤田君の快諾をうけ」になったのは、実際は「フンガイ」の経緯があったのだから心情的には必ずしも納得できるものではない。ここには鎌田の妻野溝七生子に見せられたであろう「快諾」の証拠が光太郎の心に作用していることがうかがわれる。また、鎌田に対する気遣いもあるだろう。澤田にとっては「他の出版者が譲りうけ」だけは避けてもらわなければならなかったのである。また、鎌田の名を出さずに「他の出版者」とした点も、白玉書房版『智恵子抄』第五版が出来たその年のうちに「今も世上に行はれてゐるやうである」とひとごとのように書いたことも光太郎の本心であるとは思えない。これは、龍星閣版の『智恵子抄』を正統な版であるという印象を世間及び鎌田に持たせたいとする澤田の要望に沿ったものと考えていいだろう。

鎌田が一旦はこの『智恵子抄その後』の権利を光太郎からもらったらしいことが、光太郎から鎌田への手紙に澤田の申し出に対して「当惑してゐます」と書いたことから想像できるということは前回述べた。その「当惑」を押して花巻に訪ねてきた澤田の「懇願」を入れて光太郎が『智恵子抄その後』の出版を承諾したのは昭和二十五年五月であり、右の「あとがき」を載せた本はその年十一月に出版された。

ここでついでに記しておくと、澤田の鎌田への怒りは、自らの快諾書の件を棚に上げてのことではあるが、二年前に白玉書房で原稿が

揃っていながら出版が延びたままになっていた『ロダン』の出版を実際に計画するところまで進んでいる。しかし、これは打診された光太郎に断られている。「通信記録」に、「澤田伊四郎氏よりテカミ（ママ）（ロタ（ママ）ンの言葉について）」（昭和二十五年十二月二十五日）、「澤田伊四郎氏へ返ハカキ（『ロダンの言葉』は断念してもらふ事）」（十二月二十六日）とあり、光太郎は間を置かず断りのハガキを書いているのである。

その後、澤田はとうとう我慢しきれずに『智恵子抄』復元版を出版した。これにはもちろん光太郎の承諾があったはずであるが、このときは鎌田には諮っていない。澤田が強行手段に出たのち、鎌田は光太郎に次のように書き送っている。

○急性腹膜炎で倒れた頃でした、龍星閣の澤田氏から智恵子抄を返せと言つて来られましたが、私はお断りしました。だがああして立派な本（敬服すべき見事な出来栄です）で出ましたので些か面くらひました。智恵子抄は白玉書房の代表的なものだつただけに、そして病気で暫く休んでゐた揚句のことであつただけに、他から出たことは、白玉書房の信用にも相当響いたやうでした。残念でも仕方ないことと思つてゐます。尤も内容がほんの少しでも違つてゐますので、白玉書房版は今後も出させて戴きたく、それには詩歌文庫（A6判上製本）を創刊してその第一冊を飾ることにさせて頂き度う存じます。

（昭和二十六年四月二十三日付）

これに対して、困った光太郎は、

「智恵子抄」については御返事が少々厄介です。もともと澤田さんが発行してゐたもので、言はば澤田さんによつて世上にひろめられたやうなものですから、白玉書房は一時刊行したものの、龍星閣が復起（ママ）したとすれば、龍星閣に返して上げたら如何ですか。さうすればおだやかだと思ひますが如何でせう。白玉書房で出すとしても、もつとずつと後日に出す方がいいのではないでせうか。御再考を願ひます。

（昭和二十六年四月二十七日付）

前便で「智恵子抄」は龍星閣にお返しになるのが一番おだやかな処置と申上げ、御再考を願ひました。詩歌文庫と申される新企画のものへ「智恵子抄」を入れる事ははツきりお断りいたします。従つて印刷されても小生捺印いたしませんから、此旨御諒承ください。

（昭和二十六年四月二十九日付）

と返事している。龍星閣復元版について発行のいきさつを尋ねた鎌田にひたすら翻意を促し、何らかの手で智恵子抄を手放すまいとする鎌田を冷淡なまでの筆遣いで突き放そうとしている。いったい、光太郎と澤田の間に何が起きたのだろうか。

和歌から派生した季語の本意（その十三）

「笹」佐藤喜仙

36　花野

「秋の野に咲きたる花を指折りかき数ふれば七草の花」山上憶良
（万葉集）

「秋の野に乱れて咲ける花の色の千草にものを思ふこころかな」
紀貫之（古今集）

秋の野には憶良が言うように七草を始め、多くの野花が咲き誇る。憶良は七草に「萩、尾花、葛の花、なでしこの花、女郎花、藤袴、朝貌」を挙げてをり、それが今日でも「秋の七草」とされている。自然は千三百年間変わることなく子孫を継承して来ている。

例句

天渺々笑いたくなり花野かな　水巴
北国はすでに花野や馬放つ　正雄
火の阿蘇に幼日かかる花野かな　朱鳥

37　天の川（銀河・銀漢・雲漢・星河）

「天河あさせしら浪たどりつづわたりはてねばあけぞしにける」
紀友則（古今集）

「七夕のあふせたえせぬ天の川いかなる秋かわたりそめけむ」
待賢門院（新古今集）

天の川は北半休では年中空にあるが、春は地平線に沿って低く、冬は高いが光が淡く、夏から秋にかかるころには天頂に来るので、特に目立つのである。天の川に関しては牽牛星と織女星が一年に一度会うことが許されるという伝説に基づく祭りが、奈良時代に中国から伝わり、天の川と七夕は切り離せないものになった。そのことは「万葉集」巻十秋雑歌の初めに、「七夕」の題詠が九十首以上収載されている事実により明らかである。

例句

天の川星より上に見ゆるかな　白雄
ねたきりのわがつかみたし銀河の尾　草城
九頭龍の洗ふ空なる天の川　綾子

38　案山子（そめ・おどし・とぼし・鳥威し）

「あしびきの山田のそほづおのれさへそれを欲しといふうれはしきこと」
詠人知らず（古今集）

「山田守るそほづの身こそあはれなれ秋果てぬれば訪ふ人もなし」
玄定見僧都（続古今集）

そほづは案山子のことで、もと少彦名神の異名。古い時代から農作物の鳥獣害には悩まされたようで、これを避ける方法がいろいろ考案された。その一つは鎌と鋤とに菅笠を着せて立てるものを「鎌しめ」といい案山子の言源となったようである。

例句

棒の手のおなじさまなるかがしかな　丈草
案山子立つれば群雀空にしづまらず　蛇笏
倒れたる案山子の顔の上に天　三鬼

「氷魚」のことから（127）

岡本八千代

梅雨の小雨が降っている。ダチュラの白い垂れ花から光りつつ雫している。

東北地方の大震災、大津波、原発事故より三ヶ月が過ぎつつあるのに、まだまた不安の日が続く。そういえば、わが町、三河地震も直下型であった。もう66年前のことになってしまった。隣町（形原）の人々の悲鳴が私の耳に今も残っている――。

子規の小説、「一日物語」について書く。

「一日物語」は明治27年3月23日を一として、4月22日までを二十として書いてある。作者名は、「黄鸝村人」としてある。「黄鸝は、「朝鮮うぐいす」のことらしい。（漢和辞典）子規はたくさんのペンネームを使っていたので、この作者名もユニークでおもしろい。続きものとして「小日本」へ載せた。

書きだしは、（子規全集13巻頁163引用）

一。

「春の雨夜のつれ〴〵を六畳の一間に額あつめし三四人書燈の影に火桶を抱えて今更に鉄舟居士の額を評するでもあるまじさりとて箒木の巻をくりかえして女義太夫の品定めも古いものなり。せめては菓子盆を叩きて帰らん乎を歌い時計の音を二つ三つと数えて残る一つを欠にまぎらすの不体裁をあらわさぬまでに何とか面白い問題を出して覚えず笑壺に入るの工夫もあるべし。」

と。集まった人らは、四人。甲と乙と丙と、木田といふ人ら。そこでそれぞれが言う。

甲　…「各々、今までの問に一番面白かったとか嬉しかったとかいう日があろうからそれを話したまえ」と言い出す。

乙　…「ぼくは、大学を卒業して、いざ卒業式の日が一番うれしかった」という。それは、高等中学に居る時から、卒業の時を考えて、まだ遠い遠いと毎日そればかり苦にしていたから。また、式の日は、写真を撮ったり、洋食を食べたり、寄席にゆき、圓遊の落語、賄のの征伐の話で夜を明かしてしまった事。

丙　…「始めて一篇の文章を著してそれが一円の書籍になって本屋から送って来た時嬉しく笑いたくてたまらなかった。」

甲　…「恐しかったことも話さないか」と言う。

乙　…まだ十三四位の時、友だち四五人で怪談を始め、興に入って夜十一時過ぎ、墓場から幽霊が出た。それは白張の提燈だったの話。

甲　…狂犬におそはれて、逃げに逃げたが石につまずいて倒れしてまい、起き上ろうとした時巡査が剣を抜いて僕に斬りかかってきたという、夢の話。

丙　…「何だ人をかつぎやァがった」と。

木田…「ぼくのは極めて俗なのだが全くほんとうのことがあるのだ」と言い出す。

さて、次回はどんな話がはじまるのか?。

ことのはスケッチ（392）

今泉由利

『英訳』

日本の短歌について、人間の「うた」として外国の人と話し合ってみたい。父母が望んでいたように、世界に向けて発信してみたい。「ひとの短歌」を勝手に解釈して活字にするという不謹慎なことは出来ない故、自身の短歌で英訳を試みる。

英語はネイティブ・スピーカー。スペイン語は、父母、祖父母と会話していた。オーストラリアから最近日本にやってこられたミュージシャン、ダニエルさんとの共同作業。

形式から、言語を経て、心を通過した「うた」を、英語で書き現してみた。

短歌が英訳出来たのだろうか。

○ぽつねんと闇ゆく部屋に籠りゐてただただ暗い暗闇となり

Alone, I become dark, time Passes and
I'm deep in darkness.

○薄明の空に向へりあと少し地平線に太陽きたる

The scent of light is upon us
The sun can rise above the horizon.

○幾十億をくり返しこし地球の朝今朝の光の遍ねし眩し

Morning has come like so many since the begining of time.
At the break of dawn. I am immersed in a dazzling light.

○十五光年隔つるベガとアルタイと近くしありぬ私の内

15 light years apart have come together for me to see.

○目に見ゆる形となるを見てをりぬ１３０億年の昔の光

I'm looking into the space of yonder
130 billion years of evolution.

○地球上の時計に測れぬ時といふ大きく小さい宇宙の時間

Clooks can not measure the time of space itself.

和菓子街道（58）

http://www.trad-sweets.com/

平 松 温 子

旧東海道から少し逸れて四日市の街中を散策してみた。ＪＲ駅周辺は少し寂れているが、老舗が何軒か残っていて、和菓子屋探訪の楽しみがある。岩嶋屋も、散策中に見つけた菓子屋だ。

こちらのうすかわ饅頭は、昔ながらの酒素饅頭。炊いたもち米に米麹を加えて発酵させ、その上澄みの酒素に小麦粉を加えて発酵させ、餡を入れてもう一度発酵後、一気に蒸し上げる。

岩嶋屋の母体は、郊外の菰野にあった天保８年（1837）創業の川北屋。明治になって廃業した後も、家の女性が酒素を守り、後に岩嶋屋を開いた。店はその子供たちによって暖簾分けされた。四日市のこの店もそのうちの１軒だ。酒素は菰野の本家から受け継いだものに継ぎ足し継ぎ足しして使っている。

透けるように薄い皮から、小豆餡がところどころ、顔を覗かせている。

先代に子供がなく、甥である現当主と養子縁組をしたそう。天保以来の酒素と製法を守るためだ。饅頭に託した思いは、血よりも濃いのだ。

◆岩嶋屋
住所：三重県四日市市新々町3-7
電話：0593-52-3611

お知らせ

▽九月号原稿は、八月一日(月)までに、必着、郵送のこと。

※毎月の原稿が、期日までに到着しないと、編集に支障をきたします。郵便の休配(日曜、祝日)を考えあわせて早目に送付してください。

※掲載ずみの原稿は、毎月の三河アララギ誌と共に返送しますので、返信用封筒は不用です。

歌稿の送り先

東京都北区王子本町一の二六の六A

〒一一四-〇〇二二　今泉由利

※原稿用紙は、二百字詰(20字×10行)を使用し、文字はわかりやすく楷書で濃く大きく書いて下さい。

編集後記

六月二十六日　日曜日、御津町生涯学習会館において第905回の三河アララギ歌会が開かれました。

心配された雨も終日降らず、参加者十三名(欠席者一人)にて、懇親会を兼ねた昼食会の後、十二時半より、各自二首の詠草を、批評・講評していただきました。大変勉強になりました。今後の歌作に大いに役立ててゆきたいと思います。

また、詠草の合評の残り時間を使って、五月号の各自の歌を手短かにご講評いただき充実した時間を過すことができました。御出席の先生方、会員の皆様ありがとうございました。

△三河アララギ誌の追加をご希望される場合、追加数一冊までは無料です。

△ますます暑くなります。水分の補給、無理をしないなど体調の管理を心掛けて夏をお過ごし下さい。　(平松)

三河アララギ規定

◇「三河アララギ」に短歌を寄稿する者は、「三河アララギ」会員であることを必要とする。

◇規定の会費を送金すれば、すぐに会員になることができる。

◇会員には毎月歌誌「三河アララギ」を送付する。

◇会費は、平成十年一月一日より、半ヶ年分一万円、一ヵ年分二万円の割で前納されたい。ただし、購読会員は、半ヶ年分二千円、一ヵ年分四千円とする。

◇会員は、住所変更の際は、すみやかに通知せられたい。退会の際も同様ただちに連絡せられたい。なお、退会の際の既納会費は、返戻しない。

◇会員は、発行所開催の諸会合に自由に出席することができる。

◇会員は、短歌・その他論文・随筆等を送稿することができる。毎月一回一日締切り厳守。なお原稿は一切返却しない。ただし返送希望者は返信封筒の同封があればお返しします。

平成二十三年七月二十五日印刷　第五十八巻　第八号
平成二十三年八月一日発行　定価　六百円

編集部　岡本 八千代・小野 可南子・夏目 勝弘
　　平松 裕子・山口 千恵子
発行人　今泉 由利
発行所　三河アララギ会
　　三河アララギ発行所　〒四四一-〇三一一
　　豊川市御津町御馬西三七
　　TEL　(〇五三三)七五-二〇〇九
　　振替口座　〇〇八三〇-六-五六二九
　　URL　E-mail yuri88@cronos.ocn.ne.jp
　　Homepage http://imaizumiyuri.jp/
印刷所　株式会社 桜創美